

第1章 戦場

中国・東南アジアでの戦い

だましたシヨツク

安島源一さんのお話から

○宮城 天皇の住居。戦後皇居と改められる。

○支那事変 昭和十二年（一九三七年）から昭和二十年（一九四五年）の間、日本と中華民国との間で行われた日中戦争に対する当時の日本の呼び方。

○召集 人を軍に呼び集めること。

○下士官 士官・准士官と兵の間に位する武官。

○経理 会計に関する事務。

○近衛師団 皇居の警護及び天皇の儀仗兵（天皇・皇族などにつけられた兵

私は、部隊が東京でした。九段坂にある近衛歩兵第一連隊です。あそこで陛下をお護りするお役目を仰せつかったものですから、毎日、宮城へ駆け足させられました。

私が初年兵として軍隊に入った後に支那事変がありました。昭和十二年（一九三七年）の七月七日です。そのとき、私は二十一歳でした。早く故郷に帰りたいと思ったのですが、どうせ召集されるなら、階級は一つでも上の方がいいということで、下士官に志願しました。

体も無理をしないで一番楽なのは何かというと、主計なのです。主計というのは、経理官です。昔は、主計は軍人ではなかったのです。そういうことで、軍隊でも非常に苦勞に差があるわけです。

戦争といっても、私たちは弾を撃たない兵隊です。そろばんを打っているわけです。そして、戦争を始めたなら何をしたらかという、兵隊の物資の買いつけです。一個師団を養うために、一日二千梱の糧秣が要るのです。糧秣とは、人間が食べるものと馬が食べるものです。

戦争というのは年がら年中やっているものではなくて、ばちばちと二週間か三週間やって、敵も味方も引き揚げて、次の戦闘の準備をするわけです。ところが、食べる方は三食、食べるわけです。その食料調達を私はやっていました。

私の部隊の近衛師団は、先に南支那（現中国南部）に行つて、そこで中国と戦争をしてみました。そして、昭和十五年（一九四〇年）八月にフランス領のインドシナ（現ベトナム）に進駐しました。そこにサイゴンという街がありまして、今では名前が変わってホーチミン市になりました。

隊)としての任務を与えられた陸軍の師団。

○インドシナ(現ベトナム) 表紙裏地図

○満州 中国東北部。

○奉天 表紙裏地図

○穴かがり ボタンを通すためにあけた穴の縁を糸で縫うこと。

たけれども、フランスがつくったきれいなまちで、そこに近衛師団が進駐したのです。

私は終戦間際の昭和十九年(一九四四年)

九月六日に北海道に渡ってきました。札幌へ行けという軍の命令でした。あのときは、満州の奉天に行くのと札幌に行くのとどっちを選ぶかと言うものですから、私は何も知らずに札幌へ行くと言いました。

満州は、当時、終戦間際でも家族と一緒に行けたのです。私は、独身ですから、どこでもいいわけです。函館に上陸して、汽車に乗って札幌まで来ました。

札幌では、軍需物資の調達関係の仕事をしました。特に被服廠(被服工場)ですから、女学生には大した世話になりました。下着のことを襦袢と言うのですが、それにボタンをつけたり穴かがりにしたり、それを藤高女と北海道庁立札幌高女(現北高)と札幌市立高女(現東高)の四年生を動員しまして、随分縫ってもらいました。三校とも、よその学校



イメージ図

インドシナ、サイゴンへの進駐の様子

だましたショック

に負けられないといって女性方が頑張ってくれました。夜も寝ないと言うので、それは困るということで、私は、何回かお父さん、お母さんに申しわけないから帰ってくれと頼んだことを覚えています。真剣にやってくれました。

学校の体育館をつぶして裁縫工場にして、裁断をしたり縫ったり。本当に負けず嫌いで、泣きながらやってくれました。感激しましたね。私は今でも感謝しております。ちょうど私より十歳若い人が多かったですね。軍だから、月に二回か三回くらいパンが一つ配給になるのです。たまにパンを配給すると、喜んでいました。

札幌商業学校（現北海学園札幌高）の二年生の生徒と北海中学（現北海高）の四年生の男の子を動員して荷物かつぎもしてもらいました。生徒さんはよくやってくれました。四年生にもなると体も立派ですから、重いものをどんどん運んでくれたことを今でも覚えています。

終戦になって一番思ったことは、一般の国民をだましていたということです。私も日本は絶



被服廠で働いている女学生

イメージ図

○内地 明治期以降の通称で、北海道を除く青森以南の日本国内をさす。

○旧制中学校 現在の高校での教育内容を教えた学校。

○野積み 屋外に積むこと。

○種羊場 綿羊飼育のためめめめめ。大正時代に月寒種羊場が置かれた。

○孤立無援 ただ一人で、助けのないこと。

対に勝つんだ、だからみんな頑張ってくれと言いました。うちの部隊も、兵隊はいないけれども、一般の工員が八百人ぐらいいたのです。さっき言った女学生を動員してね。終戦のときは、まるで僕がうそ八百を並べたような気持ちになってしまいました。これが一番のショックでした。

それで、本当は早く内地に帰りたいのですが、帰れないのです。北海道も軍需物資を全部アメリカに引き継いだのですが、アメリカの兵隊に引き継ぐのに二カ月ぐらいかかりました。あれを、アメリカではなく、札幌でも市民はみんな苦勞しているの、市民に分けてやりたいと思いました。

軍需物資や食料を集積していた場所は市内に何か所もありました。各女学校や旧制中学校の校舎や体育館ですね。それから、野積みです。それと、終戦間際は、ツキサップ（現月寒）の種羊場です。札幌市内が爆撃されて焼けてしまうから、焼けないところ運ぶということ、当時、種羊場に羊はいなかったもので、そこから、その場長に頼んで、何百台という馬車で札幌市内の被服品を持っていったのです。

戦後、あまりにも苦しい生活を続けたものですから、どんな苦勞も苦勞と思わない人生を送りました。私は札幌に知人が一人もいないので、本当に孤立無援で、四年間、残っている事務（仕事）の整理をしました。何でこんな苦勞をしなければいけないのかと思ったものです。

DATA

平成21年度中央区平和事業
聴き取り

- ・平成21年8月26日
- ・中央区役所



安島源一(あじま・げんいち)さん

- ・大正5年(1916年)生まれ
- ・札幌市中央区在住

だましたショック